

◎大楠 清文¹⁾

東京医科大学微生物学分野 教授¹⁾

本ランチョンセミナーでは「菌種の同定」を再考しながら、CLSI 会議の情報、MALDI-TOF MSによる同定法、感染症の遺伝子検査に関する最新の動向を紹介したい。

日常検査における「菌種の同定」をもう一度考えてみよう！

私が想起する“菌種の同定”は「その菌株が分離された患者の臨床症状、病態、治療経過を把握・検討しながら、グラム染色所見、集落の特徴、簡単な生化学性状などから菌種を想定したうえで、自動同定機器やキット、MALDI-TOF MS、遺伝子解析などのデータを“道具”として総合的な視点で行うこと」である。さらに、“究極の同定”とは、患者の臨床症状、病態、治療経過を把握・検討しながら、グラム染色所見、集落の特徴、簡単な生化学性状などを基にして“一瞬で菌種を想定”できることではないでしょうか。つまり、日常検査における同定の第一歩は snap identification、一発同定にある。最初にグラム染色像や集落を観察して“ひらめく”かどうか、そこからがスタートである。そして、菌種同定のプロセスは経験や勘に基づく直観的な判断（暗黙知）をいかに客観的な証拠（形式知）で明らかにして、ウラを取りながら迅速かつ正確な同定へと繋げるかにかかっている。自動同定機器やキット、MALDI-TOF MS、遺伝子解析などのデータはウラを取るための“道具”だとの意識改革が大切である。これらのキットや機器が出す菌名に付度することなく、自らの知識と経験で起炎菌を決定することが何より重要である。付度すべきは、目の前の集落が患者に悪さをしている起炎菌なのか、その集落の同定や薬剤感受性試験を実施することで患者の感染症診療に貢献できるか、なのである。